

の雨量が予想される場合、

風速だけから見ると、かさはさしにくい状態にあるそのみでなく、相当にはげしい雨が降っていて、登校、下校はむずかしい状態である。

(2) 学校としてなすべきこと、

- ① 台風情報や実状を見て、避難の基準に従って対策をたてる。
- ② 交通事情を考慮し、バスなど同一路線の学校と連絡して、時差下校をする。
- ③ 危険箇所を調査しておき、万一の場合の通学路を指導しておく。
- ④ 台風の雨の断続的な特徴を理解し、小止みになり

たる時をみて下校させる。

(3) 台風情報に対する希望、

① 台風の性格を明らかにする。

雨台風か、風台風か、その両者か。

② 風速とその継続状況、

③ 降雨状況と雨量、

②と③については、地域別の的確な情報を出して欲しいものである。

最後に、ご指導いただいた高橋浩一郎博士、三宅泰雄教授、成瀬弘氏、資料をかして下さった当舎万寿夫氏に感謝の意を表する。

IUGG 総会ニュース

9月25日より10月7日まで、スイスのチューリッヒ市にて、IUGG (International Union of Geodesy and Geophysics) の総会が4年ぶりに開催された*。日本からは萩原尊礼代表をはじめとして総数41名(国費出席者は3名)が出席した。気象分科会からは、磯野、浅井、関口、柳井、鳥羽の各氏が参加された。

一番主な議題は IUGG の規約改正であった。改正点の主なものを列記すると次のようになる。

(a) IUGG 総会は、今までは3年に一回開催されていたが、これからは4年に1回開き、総会は business meeting とする。したがって今までのような scientific meeting は行わない。

その代りに、各分科会でそれぞれ総会の間 scientific meeting を行なう。

(b) 副会長 (Vice President) を今までの2名から1名に減らす。

(c) 今までは59ヶ国で構成されていたが、今回10ヶ国の新加入が認められた。アジア地区に関係した新加入国は、朝鮮人民民主主義共和国と中華民国の二国である。ドイツは東ドイツと西ドイツの二つに分れた。

次に、新しい執行部の委員は次のようにきまった。

会 長: J. Coulomb (フランス)

副 会 長: 久野 (日本)

委 員: L. Constantinescu (ルーマニヤ), T. F. Malone (米国), A. M. Oboukhov (ソヴェット)

会 計: E. Andersen (デンマーク)

事務局長: G.D. Garland (カナダ)

上述の新しい執行部のもとに、7つの分科会が属するわけであるが、気象分科会の国際組織である IAMAP (International Association of Meteorology and Atmospheric Physics) については、

会長: R. C. Sutcliffe (英国) 事務局長: W. L. Godson (カナダ)

の両氏が選出された。

IUGG 総会では24の決議がなされたが、気象に関係するものとしては GARP (Global Atmospheric Research Program) に関する決議がなされた。

決議文によると、GARPの仕事にかんがみ、新しく組織がえを行うように提案されている。新しい組織名は、

ICSU/IUGG Pannel on GARP

となって**、Pannel の President は IUGG の会長となり、事務局には WMO 代表、委員には今までの GARP 委員会から数名の学識経験者がでることになっている。

なお IAMAP および IAMAP 内の各委員会(力学委員会、雲物理委員会、放射委員会、オゾン委員会、高層大気委員会……)の新役員、決議などについては、詳細がわかり次第掲載していきたい。(文責 地物研連気象分科会幹事 岸保勘三郎)

* 日本の国内組織は日本学術会議地球物理学 研究連絡委員会が対応している。この中に、気象分科会、海洋分科会、地震分科会など7つの分科会がある。

** ICSU は International Council of Scientific Union の略で、日本学術会議の国際組織に対応する。